

地域情報（県別）**【栃木】「病気に日曜日はない」全国に先駆けて無休の在宅医療体制を始めた理由-太田秀樹・医療法人アスムス理事長に聞く◆Vol.1**

2019年11月18日(月)配信 m3.com地域版

栃木県と茨城県で3つの在宅療養支援診療所を運営する「医療法人アスムス」理事長の太田秀樹氏は、日本における在宅医療のパイオニア。障がい者との海外旅行をきっかけに病院に来られない人のために医療を行おうと開業した太田氏は、当初から24時間365日体制で在宅医療を展開。「病気には日曜日がないから」とその理由を話す太田氏はどうやって前例のない仕組みを作っていたのか。（2019年7月22日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら

——まずは法人の概要についてお聞かせください。

在宅医療に注力するクリニックを3つ、栃木県小山市と栃木市、そして茨城県結城市で運営しています。私が本院の「おやま城北クリニック」を開設したのが1992年で、地域のニーズがあったことから「蔵の街診療所」（栃木市）を2000年に、「生きいき診療所」（茨城県結城市）を2008年に立ち上げました。各クリニックはそれぞれ訪問看護ステーションを備えています。

どのクリニックでも午前外来を、午後は在宅医療を行うというスタイルで、クリニックにはそれぞれ院長を据えています。私は長く本院の院長と理事長を兼任していましたが6年前に還暦を迎えたのを機に院長を降り、現在は理事長に専任しつつ週に3日ほど外来診療と在宅医療を行っています。訪問患者数は法人全体で300人ほどで、年齢を問わず0歳から100歳代までを対象にしていますが、9割近くがご高齢の方。患者さんの8割ほどを看取っています。

医療と介護のハイブリッド型であることも当法人の大きな特徴で、介護老人保健施設「生きいき倶楽部」とグループホーム「生きいき」を茨城県結城市で運営しています。



太田秀樹氏

——長く在宅医療に携わっているとのことですが、どんなきっかけで関心を持ったのですか？

障がい者の海外旅行に同行したことがきっかけです。私は1979年に日本大学医学部を卒業後、麻酔科を経て、整形外科医として自治医科大学附属病院に勤務しました。1991年の6月、ある車いすの障がい者が「グループで海外旅行をしたいが、旅行会社が医師の同行を条件にしているから協力してほしい」と相談に来ました。

彼らとアメリカ、カナダを2週間にわたって巡ったわけですが、旅先で私は衝撃を受けました。病院ではすいすいと押せる車いすが、外の道だと押せないのです。直径15cmほどの前輪ではほんの少しでもこぼこがあれば大きな障害になります。座らせてもらおうと、すぐに腰が痛くなりました。「これで生活しているのか…」と驚くと同時にその苦労を想像しました。

そして、彼らは嘆いていました。「医者都合のいい患者の都合のいい病気が診ない」と。障がい者に対する医療機関の受け入れ体制が不十分であるだけでなく、自分の専門領域しか診ない専門医への痛烈な批判も聞きました。

彼らは普段、体調が悪くなると、薬局の市販薬で様子を見るか、我慢した末に救急車を呼ぶか、選択は2つだったといえます。

——先生が本院を開いたのが1992年の4月ですから、この出来事から1年も経たずに開業しています。

私たちが海外旅行に行っていた間にちょうど、長崎県の雲仙普賢岳で大火砕流が起きたんですよ。これもショックな出来事でした。当時はまだテレビで震災時の生々しい場面を放送していた時代です。画面越しに人が火砕流に巻き込まれる様子を見て、亡くなられた方のご家族の悲痛な声を聞きました。「何が起きるかわかんないんだよな…人生は」。そう思った瞬間に「もう大学を辞めよう」と、そんな考えが浮かんでいました。

当時の私は言ってみれば、白い巨塔ではエリートコースを歩んでいました。自治医科大学の大学院を修了した後にすぐに助手、専任講師、医局長と出世し、整形外科医としての仕事にもやりがいを感じていました。しかしながら、私が手術して元気に退院したものの、しばらくして寝たきりになって戻ってくる患者さんがいました。退院後の患者さんの暮らしを知ることができないことにもややもとした感じを抱いていて、海外旅行の一件で病院に来られない障がい者の存在を強く意識するようになりました。病院に来られないのは障がい者だけではなく、体が不自由になった高齢者も同じです。その高齢者はこれからどんどん増える、となれば、医療の出前が求められるはず。住み慣れた自宅で最期まで暮らすお手伝いもできるはずだ。と、こう考えてすぐに行動に移したわけです。



およま城北クリニックの外観（同院提供）

——開業当初から24時間365日体制で在宅医療を行っていたそうですね。当時は非常に珍しかったのではないのでしょうか。

そもそも、当時は在宅医療に注力する医師自体が少なく、全国でも極めて珍しい存在だったと思います。ですから、今でこそ在宅療養支援診療所の認定条件になっている24時間365日グループ診療体制での在宅医療と訪問看護を行ったのは、当法人が初めてかもしれません。

取材ではよく「なぜ全国に先駆けて24時間365日対応を」と聞かれますが、答えはシンプル。だって、病気には日曜日がないでしょう？ 私の父の時代もそうでしたが、昔の開業医は夜間往診も行って、それが時代の流れとともに希薄になっていったわけです。とはいえ、その文化を個人で復活させたとしてもさすがに1人で24時間365日は対応できないので、そうできるためのシステムを作りました。

気の合う医者誘って2人で協力しながら診療する体制を作り、さらに4人の看護師からなる訪問看護チームを組織しました。「24時間365日対応」と聞くと何だかすごいように感じる人もいますが、病院でも入院患者みんなが毎夜急変するわけじゃありません。日ごろは看護師の対応で十分なことがほとんどですから、在宅医療を展開するためには感性の豊かないい看護師を引っ張ってこることが大切です。開業前は看護師をよく飲み誘って口説いてましたよ。私がやりたいことを話すと「私も！」と手を上げてくれる人がいて、加わってくれた4人の看護師とは今でも一緒に働いています。子育てに悩み、更年期障害に悩み、そして還暦を迎えた彼女たちとは共に四半世紀を歩んできた仲間なのです。

◆太田 秀樹（おた・ひでき）氏

1953年奈良市生まれ。1979年に日本大学医学部を卒業、自治医科大学大学院を修了後、同大専任講師などを経て1992年に在宅医療に注力する「およま城北クリニック」（栃木県小山市）を開業。現在、隣接する栃木市と茨城県結城市でも在宅療養支援診療所を運営する。医学博士、日本整形外科学会認定専門医、麻酔科標榜医、介護支援専門員。

【取材・文・撮影 = 医療ライター 庄部 勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

